
ある日の昼下がり

修難

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の畳下がり

【著者名】

Z3442G

修難

【あらすじ】

普通の学校に普通の日常を望む俺。だが、周囲が普通じゃない。即ち、普通の日常が特別となる。ならば、俺は自身の力で掴んでいいこととする。そんな物語である

第1話・不安（前書き）

前書きがあったから、せっかくなので一言だけ。
これを楽しく読んでもらえたら嬉しいです。

第1話・不安

俺は走る。

あの真っ赤に燃えている太陽に向かつて。

なーんて熱血バカな行動をするわけはないが、走っているのは事実。

今の時刻は遅刻ギリギリの瀬戸際。だから、走っている。

昨日の夜、ひさびさにギャルゲーをやっていたら熱中してしまい、そのまま無意識の内に就寝した。そこで目覚ましをセットするのを忘れていたわけ。

走りながら俺は重たくなる瞼をこじ開く。眠たい。

途中、石につまずきそうになる。寝不足だ。

今時、珍しいローザントの髪を持つ不良共と遭遇する。おお、絶滅危惧種。

とりあえず、なんのものにも田もくれず走る。

だが、そんな時だった。

「オ～～ワタシヒトサガシヨシテイルモノデ～ス。ソコノアナタ、ヒトサガシノキヨウリヨクオネガイシマ～ス」

などと、作り物の鼻を付けた兄貴が寄ってきた。

とりあえず殴つておく。

「ぐほッ……な、何故、お兄ちゃんを殴るんだい？ 我が弟よ」

「イキナリわけも分からん似非外国人に扮して、俺に近づこうとしたからだ」

「フツ、それは違うぞ」

怪しげに笑う兄貴に対し一歩下がる。

こんな変人に見えるような人だが、れっきとした俺の従兄。だが、従兄とは言え、関わりたくない奴だつているものだ。

例えば、目の前の見るからに変質者であるこの男には特にな。つぐづく思い知られる。

過去の思い出が走馬灯のように駆けまわり、頷いた。

兄貴は高々と両手を広げ、まるで神に言ひかのよう。

「俺はただの男のお前には興味がない。俺が興味があるのは……」

一呼吸を入れて宣言する。

「シスコンだ！…… つまり、お前の……」

俺の引きつっていた顔がますます引きずる。

「妹の方に興味が！…… ぐはッ！？」

有無を言わせず、もひー発殴る。

兄貴は思いっきり吹き飛び、「」の溜まり場に激突した。

そのまま兄貴は夢の中へと飛んだ。

「これだから兄貴とは関わりたくないんだよ…… ハア」

肩を落とし、溜息がこぼれる。

兄貴とは昔からの知り合いである。そして、俺の妹の舞とも知り合い。

その兄貴が特に舞にじご熱心なのである。理由は知らんが、ただ言い放つてることがある。それはせつきも言っていた通り、兄貴はシスコンひらし。

なのでいつ襲われかねん舞を、別ルートから行かせているのだ。兄貴には秘密のルートなのである。

だから、そのルートを知りたがって、いつもこうして俺が通るであらうこの道で待ち伏せしてはつかつて来ているのであった。

説明は以上。

俺は途方もないような道を走り続けた。

第1話・不安（後書き）

後書きもあつたので、次で書きます。

走り続けて、十数分。

そんなこんなあつたものの、そこの角を曲がれば学校までは一直線だ。

ふと、脳裏に昨日やつたギャルゲーの初めの部分が甦る。

「ハアハアハア、クソッ。遅刻までギリギリじゃねえか」

学校までの道のりを、主人公が行きよいよく走る。

その途中、角を曲がろうとした主人公。

だが、そこで誰かとぶつかってしまった。

主人公と誰かはしりもちをつき、主人公は打ちつけたとこを摩りながらも直ぐに立ち上がる。

細目で開いた主人公は、相手も倒れたことを知り、思わず手を差し出した。

「悪いい、ちょっと急いでいたんでな」

主人公は相手をよく見ている。少女だった。それもつむの学校の制服を着ている少女。

少女は俯きながらも差し出された手を見て、一瞬ビクッと震えた。

数秒間、様子を見た少女は差し出された手に、自分の手を伸ばす。そして、またビクッと震えた。

だが、俺は何の迷いもなく田の前にある手をにぎる。

「引っ張るぞ」

一聲掛けて、少女は頷く。

主人公が立ち上がるよう引つ張ると、思っていた以上に軽く、スッと立ち上がった。

手を離すと少女はパツパツと制服を調えた。

それから俺と向き合ひ、俯き加減であつた少女は少し顔を上げる。

綺麗、或いは可愛いと言つべきであろう、そんな少女はそこにはいた。

主人公と田と田が合ひ。少女の顔は薄く朱に染まっていた。

また少女は恥ずかしそうに俯いた。

少し、拳動不審な少女はそつと口を開く。

「あ、あり、ありがと……ん、ありがとひいります」

一瞬、時間が止まつたような気がした。

そして、胸の中がザワツと騒ぐのを感じた。

後にそれが何を指しているのか、今は知らずに学園生活を送りつとしていた。

といった具合のベタなシチュエーションが脳裏を横切る。

その時、俺は淡い期待をしてしまった。

角を曲がれば、恋が待っているのではないか。

現実では一切ありもしないこと。それを望んでしまったのだ。

足を一步、一步と踏みしめることで、角が迫つてくれる。

もし、そこに恋が待っているのなら、俺はどんな人が良いだろ。

昨日のギャルゲーのような、少し人見知りのおとなしめの子か。

或いは、学校でまた再会して「お前は、朝ぶつかつてきた男」などと書かれてるジンデレ?

そのどちらかが好みだ。

などと考えている内に、無意識に曲がってしまった。

妄想の中にいる俺は、現実が見えていなかつたらしく、誰かぶつかつてしまつ。

ぶつかつた衝撃で、二人とも尻餅をつくように倒れる。

「イテテテ……げつ、しまつた」

現実逃避しかけていた俺は、現実的な痛みですぐさま現実に戻り、倒れた相手を見る。

どこかの女子生徒だつた。ショートカットの少女は俯き、そのまま固まつている。

「あひやー、本当に起ひるとほな」

少し後悔するように、相手には聞こえない程度につぶやく。

そして、手を差し出した。

「ほら、掴まれ。遅刻すつぞ」

現実世界に戻つた俺は遅刻といつものを思い出した。

今日はヤバイ、特に今日だけは遅刻は出来ないのだ。それだけの理由はあるわけ。

俺がここにいるとこついとま、この木もギョギリなのだろ。なんとなく思つ。

少女は差し出した手を見る。

少し首を傾けた。フワリと髪が揺れる。

「今日は急がないとヤバイだろ？ 互いにな」

俺は少女の手を強引に手を取る。

少女はビクッと震えたようだが、それはお構いなしだ。

なんせマジで時間がギリギリなんだかい。

「引つ張るだ？」

少女は頷く。

加減は分からぬが、手助け程度に引っ張つてやる。

そしたら勢いあまって今度はいきなりの方に倒れる形となつた。

俺は両肩を手で押さえるように支える。

その時、香水か何かは知らんが、ビンか甘いにおいがした。

何故か胸が騒ぐ。

それから嫌な予感がした。

田の前にあるこれは何者だらう？

心の疑問、本能が俺に告げる。

これは関わってはならない者。

「…………？」

「…………？」

華奢な体つきの少女は、体に伴つた声を発した。

小さくて聞こえずらかったが、確かに聞こえた。

お礼を云ふる言葉。

“ ありがとう ” と。

第2話・運命（後書き）

さてと、読んでくださってどうだつたでしょうか？

まあ、そちら辺は評価していただいて、と。

次回は前書きを書きます。

第3話・呆氣（前書き）

そういうえば、風邪を引いています。

なのでオカシイ部分があるかも知れませんから、ご了承を。
ああ。一応言つておきますが、言い訳ではありませんよ？

第3話・呆氣

「フウ、なんとか間に合つたか」

俺は落ち着きを取り戻し、胸を撫で下ろした。

「お前、ほんとギリギリだつたよな」

横から聞こえてくる声。

「ん?と横を振り向く。

「よつ、久しふりだな。三日ぶりか」

「……誰?お前?」

冷たい一言に傷つく水谷^{みずたに}。

「ガーン……つて、嘘だろ?」

「ああ、冗談だ。谷水」

「つてか、間違つてるし。逆だー逆ー!」

「逆?」

少し考えるより手を顎にやる。

数秒後、平手の上に握り拳を置くよつなポーズをした。

「そ、うか」

「ねつ? もうと、照に用ひたか?」

「ああ、やつと分かつたぞ。
にたすみ」

「そこの逆ジヤねえ～～！」

水谷は頭を抱えるよ／＼にくねくねと動く

それが気持ち悪かつたのか、四方八方から冷たい目線で見られ始める。

一曰、俺は他人のフリをした。

数分間それは続き、水谷自身もやつと状況を察したのか、小さく縮んだ。

それからそつと俺につぶやく。

「俺つて浮いてた？」

「ああ、馬鹿みたいに浮いていたぞ。やつたな」

俺は親指を立てる。

水谷は顔がこれ以上ない位に引きつっていた。

多分、俺の学園生活があああ～～！－などと考えていてるのだろう。

今は体育館の中には、ステージの上には“入学式”などと書かれた布が飾られていた。つまり、今日は俺達の入学式なのだ。

入学式当日に遅刻なんてしたら、色んな奴に田を付けかねんからな。

喧嘩は上等だが……いや、むしろ歓迎?でも、普通に学生生活を送りたいと思った。

この頃になつて普通という田々が一番だと思つたわけ。普通=平和だからな。これが俺にとつての方程式。

「そういえば、なんでいつものように、怜奈さんに起じしてもらわなかつたんだよ?俺なら大歓迎なんだけどな~」

絶望していた水谷が正常に戻り、普通に話しかけてくる。

切り替えが早い奴は良いよな。いや、コイツの場合は単なる馬鹿か?

「ん?今、俺を馬鹿にしてなかつたか?」

「イヤ、シテマセンケド?」

だが、馬鹿は馬鹿でも野生の勘だけはあるよつだ。

「怜奈姉さんね……あん人苦手だわ、俺」

「そつか? ただお前のことが好きなんじゃね?だから、あんだけべ

タベタとくつ付いてくるんだろ?」

「ううなのだ。白石怜奈姉さんは事実上パソコン。何故か標的が俺だけという最悪な状態にある。

だが、パソコンである兄貴のような自称はしていないものの、明らかにパソコンといつのままだと見えていた。

別に俺は怜奈姉さんを嫌いというわけじゃない。むしろ従姉としては好きだ。

でも、それ以上の感情がない。ハア、いい加減にしてほしいものだ。怜奈姉さんにも。

怜奈姉さんのことを考えると頭が痛くなつてくる。

頭を横に振り、別のことを考えた。

ふと、さつきのことが甦る。あの少女のこと。

あれから少女はお礼を言つて、すぐさま走つていってしまった。

ぶつかつたのは明らかに俺の不注意だ。

だから実際は、お礼を言わることなんて何もしないことこの上ない。

「ハア、複雑だ。」

俺が色んなことで苦労していると、やつと姉々と校長の話しが終わつた。

かれこれ三十分だつたか。長いにも程がある。

そして、最後に生徒会長の一言 !?

忘れていた。この学校の生徒会長と副会長を。

そういえばこの人達だつたな。怜奈姉さんに兄貴。

ステージ上を優雅に、そして、堂々と歩く姿は誰もが見とれる。容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群。それが怜奈姉さん。

その後ろにはメガネを掛け、自信に溢れている顔を持ち、黙つていればモテそうな男。それが兄貴。

この一人が生徒会を纏めているらしい。それもまだ一年であるこの人達。そこがまた凄い。

だが、こんな一人にも弱点といつものが存在する。

それは俺と舞である。

怜奈姉さんは俺の前では、擦り寄つてくるように甘えてくる。それを引きは離そと俺は大変だ。

兄貴は舞の前では、鼻の下を伸ばし危ない目付きで見てくる。

舞自身が気付いているかは別として、俺がいつも殴つては蹴り飛ばしている。舞は世間で言う天然であるから、危なつかしい所が多すぎだ。

だが、それを取つてしまえば完璧といつても過言ではない。

それほどまでに優秀だといつのに……ハア、人生を棒に振つているようなものだ。

怜奈姉さんがマイクの前に立ち止まつた。その後ろには兄貴が控えるように立つ。

そして、そつと口を開く。

「私がこの学校の生徒会長、白石怜奈です」

シーンと静まり返つた体育館に響く。

一見、大人の女性らしい落ち着いた口調だが、どこかしら威厳に満ちていた。

「今年、入学した方々、おめでとう。私はHG……もとい、校長のよつに長々と話す気はさらさらありません」

HG?ふと、口からこぼれた言葉に疑問を持つ。

だが、そんな些細なことは俺しか注目していなかつただろう。

何故ならここにいる全ての人が、怜奈姉さんの美しくも鋭い眼光にやられていたのだから。

それは俺の友人である(?)水谷や先生方も例外ではなかつた。

「私が言いたいのはただ一つ」

怜奈姉さんが一息吐き、静かに手をつぶる。

体育館にとめどない緊張がはしる。

そして、ゆっくりと手を見開いた怜奈姉さんは、じつに言した。

「この私が生徒会長である限り、普通の学生生活が送れないことを了承していただく」

体育館に緊張していた空気が一転、はあ？というハートが豆鉄砲を食らったかのような顔を誰もがした。

まあ、俺はというと怜奈姉さんらしいな、なんて思っていた。

「いや、決めるもなにも、私に従うしか選択権しか残つてない。だから、ここでは私が絶対といふことで、よ・ろ・し・く」

言いたいことだけ言つて、怜奈姉さんはステージ上を後にした。

最後に残つたものと言えば、男女生徒先生問わず、怜奈姉さんの最後の色目にやられていた者達の末路だけだった。

俺は溜息を吐いた。

「大丈夫か？この学校？」

怜奈姉さん一人でこの有様の生徒先生を、どこか哀れむように見る俺。

だが、よく見渡すと怜奈姉さんの色面にも負けていない奴らも少なからずいた。

思っていたより、普通の奴もいるのか。少し安心する。

ステージ上を見た。兄貴と曰が合いつ。

兄貴は“呆れた”といつ風に首を振っていた。

そこで俺はふと思いつ。

案外、怜奈姉さんと兄貴

あんまし変わらんぞ？

第3話・呆氣（後書き）

本当は書く気はなかつたんですが、一言だけ。
HGつてのはここだけの話し“ハゲ”つての略です。
まあ、分かりきつてますがね。

第4話・良友（前書き）

引き続々、風邪を引いてます。
文章はご勘弁を。

第4話・良友

キー・ノーン・カーン・ノーン、チャイムが鳴る。

もうすぐH.Rの始まりを知らせるチャイムだひつ。

俺もどりどりここまで来たか。遅かったよう早かった。

昔を懐かしむ。

「…………ねえ、聞いているの……クロード……」

「つまッ……？」

すぐ耳元で聞こえる声にビックリする。

「ねえ、聞いてるや。テルリシテ反応つてのは危ないから気をつけろ、つて奴だろ?」

「違うわよーー私が話していたのはTERUMIYAって店の、スイーツの話しどしょーーー。」

怒りこぶる同じクラスの女子生徒、鈴原亜美。

「まあまあ、落ち着いて亜美ちゃん。」^{あははひあな}話しえで……

「…………ッ……」

「は、さううううう」

どうにか穩便に済ませようとして入ってきたもう一人のお淑やか
な女子生徒、山本麻里。

だが、亜美にひと睨みされてしほんだ。

「オイオイ、麻里ちゃんに当たつても可愛そりだらう。」

この場を收めようと水谷が入つてくる。

「はつ、傷跡をえぐるよひな言葉を……だ、だが、俺にもちゃんと水た……」

自分の名前を言おうかねと、水谷にやがて申す。——

「お前なんてね、名前いじられ役しかないんだから、どつかで勝手にくたばつときなさいー！」

止めの一言が効いたのか、アホ面丸出しで教室から出て行った。

もつすぐHRだつたよな?

「で、モリのテルノシトヤがどうした？」

THE! RU! MI! YA! !

「ああ、テルミニヤな」

これ以上ない位に睨みつけてきた亜美に、これ以上ない位引きつた顔で俺は言った。

亜美は肩を落とし「まあ、良いわ」などと言つてくる。

何故、上から田線なのが気になるが、これ以上聞くとさすがにヤバイので、なんとか飲み込む。

「それでさつきの話しなんだけど」

亜美から今日の帰りに、俺と亜美と麻里、あとお情けで水谷の四人で、そのTERUMIYAという店に行かないか?という誘いを受けた。

俺は正直どっちでも良いのだが(多分、飛んで喜ぶように「行く、絶対に行く」などと言ってくる水谷とは違つて)、今は金欠だ。

つい最近、入ったバイト代も、ある理由で無くなつた。

「それなら俺はバスだな」

二人の顔の表情が曇つた。

うつ、何故か罪悪感を感じる。

この頃、色々な金銭関係で付き合いが悪いせいだろうか?だが、それでも行きたい時も行けないのが貧乏人の辛い所だ。

しかし、ここでは友人をとつておくか、それとも金か？

俺の理性と欲望が戦う。

（オイオイ、別に良いじゃねえか？）

悪魔が俺に語りかける。

（金つてモンは使う為にあるんだろ？なら今使え。今、使わなければいつ使う？）

俺の中で欲望の存在がでかくなる。

だが、ここで天使が反論してくれる。

（いえいえ、ここは金を大事にしなければなりません）

天使は理性なのでまともなことを言つ。

（金は使う為にあります、貯めることも必要です）

まあ、必要と書いたら必要だな。

（ああ？ぬりここと言つてんじゃねえよ。この真面目がよー。）

欲望が理性を上回るほど、存在が大きくなつてくる。

ぐつ、少し欲望が有利か？

いや、ここで理性は逆転の必殺技を出してくる。

「ナナシ君

麻里が不意に口にする。

「ナナシ君が今回は俺の奢りだって言ってたよ？」

「ああ、そうだった。今日ヒマだったんだよな。だから、俺も行くぞ

ワザとひしゃべる俺を見て、彼女達はお互いに親指を立てていたのは気付かず。

でも、感謝だな。良き友人に。

亞美に麻里、そして…………あれ？ アイツ、名前なんだっけ？

ああ、そつか。ナナシだったな。

第4話・良友（後書き）

第4話にして、やつと主人公の名前が登場です。
まあ、呼び名なんで本名ではないんですけどね。

キーンゴーンカーンゴーン、昼休みの鐘が鳴る。

机に突っ伏していた顔をそれと同時に顔上げる俺。

「起立」

学級委員が号令を掛ける。

「礼」

一同が頭を下げて、次に上げる瞬間、それは起つた。

そつ暴動だ。

「……い、今、なんて？」

「いやー、だからね。もつ全部、売り切れちゃって何も残つてないのよー。ほんと『メンねー』

学食のおばちゃんは俺の横を通り過ぎる。

俺はその場に立ちあぐけた。さあまでパンを売っていたある日の前に。

そしてもう一人、俺と惨劇を受けた奴がいた。

み……す……いや、思い出すのが面倒だし、ナナシでいいか。

そ、名が無じと書いてナナシもまた、冒抜きとなつたのだつた。

ナナシは足から崩れ、膝がつくよつて倒れており、少し痙攣していた。

俺はといつと顔が今日一番に引きつっていた。

「マ、マジっすか？」

あれは数分前のこと。

起立、礼が終わつた瞬間を見計らつていたのか、教室のほぼ全員の男子は急にどこかへ走り去つた。

男子だけで残されていたのは、俺とナナシとこの教室の一番の常識人（？）である藤宮。

俺は藤宮に近寄る。

どうやら雑誌を見ているようだ。表紙にバイクなどが書いてある。中身もそれ関係で「っぽいだ。だが、どうも俺は興味がない。

将来、車かバイクを買おうとは思うが、あんまり詳しくは無かった。

俺が興味で雑誌を見ている視線を感じたのか、藤宮が気付いた。

「興味があるのか? クロトモ?」

「ん? ああ~いや、違うんだ。ちょっと、聞きたいことがあってな

雑誌に落としていた顔がこちらを見ている。

クールというべきなのか、無愛想なのかは定かではないが、あまり表情が顔に出ないタイプだ。

顔は悪くない。女子にモテそうなタイプというべきだろ? か? まあ、そんな所。だが、顔が無愛想だからと決して悪い奴でもない。男子にも女子にも結構人気があつて、気軽に話せるタイプもある。

「さつき物凄い形相で出て行つた男子のことなんだけど」

一瞬、固まり「ああ、アレか」と納得した藤宮は少し引きつった顔で言った。

「あれはな、簡単に言つと学食に行つたんだ」

「学食でっ。」

「ああ」

学食といえば、あのパンやり何やうが売つてゐる場所だよな。

だが、あんなに急いで行く程か？普通はもつと歩いていくだろ。まあ、小走りぐらいならするかも知れないが、あそこまでは……なあ？わざがに引くだ？

「何故に学食でっ。」

どつからか出した紙容器の飲みの物にストローを挿した藤宮は言った。

「一瞬で無くなれるからだ」

「……一瞬つて、パンとか弁当やうの他もろものとか？」

ストローを咥えた藤宮が「ああ」と答えた。

俺は「そんな、バカなあ」と笑つていた。

そして、現状に至るわけだ。

「つてか、納得いかねえええーー！」

普通はありえねえ状況だぞ？

さつき、そいつに転がっている戦争の産物に聞いてみたが、今日は五分で完売。いや、五分も経たずに完売したらしく。

チャイムが鳴って五分後には完売、といふことか。

何たる失態だ。この俺がまさかの直抜きになるとま.....ショック。

これでも欠かさず朝、昼、夜、三食を楽しみに生きてきたといふのに。最悪だ。

これでは、これまで積み上げてきた記録があああああああーー！

立ち直りしたまま、頭を下手で抑えたままの状態になつた。

これで俺もまた戦争の産物となつたことを認めたことになる。

これまた顔が引きつる。

一瞬、知り合いから分けて貰おうか？などと考えてみたが、仕方なく断念した。

つまり、まともな奴がないわけ。

亞美はあの性格だからくれないだろうが、麻里はあの性格からいくと貰えるかもしれない。

だが、問題がある。麻里は超が付くほど甘党だ。なので、麻里の弁当は甘くなっている。魚も肉も野菜も、勿論のことじい飯さえも甘くしてしまっている。全て砂糖を加えて調理しているらしいが、聞いただけで少し気分が……。

だが、俺は直ぐにこんなことをしている場合じやないと気が付き、他の友人に頼もうと思つたが結果は見えてるので諦めた。

「いんなどなら、朝、コンビニでも寄つとけば良かつたな」

肩を落として深い溜息を吐いた。

「ハア」

そんな時だつた。俺に天使が微笑んだのは。

「あの～すいません」

女の子らしい可愛い声を出して、誰かが俺に声を掛けってきた。

戦争の産物となつた俺は、気の無い返事をしてそつちを向いた。

そこには俺と同年代の子がいた。

「もし、じ、じ迷惑でなければ、一緒に……」

俺は一瞬、違和感を覚えた。

だが、その可愛らしい女の子に違和感があつたのでもつと他の恐ろしい者達に……。

「ほうほう、クロトよ。友人を差し置いて、一人だけ女の子の弁当かい？ええー？」

俺はその違和感がようやく分かり、後ろを振り向く。

ほぼ学食の奴らが一いつちらを見て、殺意に近いものが確実に一いつちらに向けられていた。

さつきまで倒れていた屍ものそのそと立ち上がり、その先頭にはナナシがいた。

「誰が友人だ。それにここにいるお前ら、何をそんなに殺意むき出してんだ？」

「そんなの決まっているだろ」

ナナシが代表として喋る。

「それは

『それは』

ナナシの言葉を繰り返しす一同。そして、静かに震えだす。

さすがに一々、相手するのが面倒臭くなってきた俺は、さつきの女の子の手を引いて連れ出す。

運良くバレなかつたようだ。

バカ一同は揺るえながら下向いていたからな、何か叫ぼうとしていたのだろう。

俺が女の子を連れ出して、十数秒後『お前が！……つていなかよ！……』と聞こえてきた。

凄いな。まさか、そこまで揃つとは今度の出来事もさぞハラックリされてくるだろう。

それに突っ込みまで息ピッタリとまどひこいつだ?

アレは…………さすがに練習してんだらうな。

ふと、逃げながらもそんなことを想い、苦笑いを浮かべたのだった。

第5話・学食（後書き）

毎日、書くのは少し辛いので気が向いたら書くことにします。
来訪者さん達は気軽に読みに来てくださいね。
待っていますよ……フフフフフ。

風が心地よく髪をなでた。その度に静かに揺れる。気持ちが良い。

鉄柵に背を預けながら空を仰ぐ。真っ青な空だった。

「あ、あの~」

「ん? ああ、『めん』『めん』で、なんだっけ?」

仰いでいた顔を少女に向ける。

少女は俺の横に座つていた。

「さっきは邪魔が入つたんで、ちゃんと言えなかつたんですけど」

近くに置いてあつた物を取り、真つ赤な顔で差し出してきた。

「わわわ、私と一緒に、お、お弁当を食べてくればせんかーーー? ?

俺は弁当をまじまじと見る。

「いじ迷惑だったでしょうか?」

「……いや、助かったよ。」

「え?」

俺は胸を撫で下ろし、ボソッと呟く。少女が訳が分からず首を傾

げる。

「ああ、今のは『ひら』の話。ありがと、有り難くも『ひら』

「ほ、本当ですかーー。」

「ああ

少女は満面の笑みで、差し出してきた弁当を両手で渡す。

俺は弁当を受け取る。弁当は四角い形をした容器に入つており、周りを青色の布で綺麗に包まれていた。布をほじき中身を見てみると、シンプルな弁当ようだった。

肉に魚やサラダ、タコをトマトソースで包んだりもある。

最初の部分なら問題はないが、最後のほうがひょっと。

弁当の「定番」といえば「定番なんだろうが、少々、恥ずかしい。実際、食べるとなると躊躇してしまつ。

弁当の「可愛らしい系部門」のおかずを食べよつか食べまいか葛藤する。

まあ、『ひら』は食わないといつ選択肢は本当の所ないのだが、やっぱり羞恥する。自分のプライドが邪魔をしていた。

「どうしました?」

少女が一向に手を付けよつとしない弁当を見てたずねる。

思わず震えていた箸を置いた。

「え？ も、 もしか、 お氣に召しませんでしたか？」

「いや、 もうこいつ誤じやないんだが……ちよつとね」

苦笑いを浮かべた。

だが、 苦笑いの方向には弁当がある。 少女から見たら、 誤解を招かざる負えない。

途端に少女は顔を暗くし、 落ち込む。

「やつですか、 ハア。 すみません、 私が食べたくも無い弁当を無理やり……」

「いや、 本当に食べたくない誤じやないんだって」

少女の言葉を遮り、 俺は弁解をするが通用しない。

つまり、 俺に残された道は唯一つ。 このタコをさといつりを食べなければならぬ。

まさか俺が、 こんな愛らしげに匹敵するとは、 中学校の頃の俺は考えも付かなかつただのつ。

だが、 それは過去の話にしか過ぎなかつた。 俺は今を生きてこる。 普通の日常を生きようとしているのだ。

またに、 これは試練といつても過言ではないのだけ。 普通の日

常を手にする最初の試練。

タコセんワインナーこうじのつわい。

俺は意を決し、箸を手にする。

そして、先ほどの震えはどこもなく、しっかりと箸を手に固定していた。

箸先はタコセんワインナーの場所へ運び、落としたままにしっかりと掴む。それからゆっくりと持ち上げた。

宙に浮いたタコセんワインナーを口元へと運ぶ。

一瞬、箸はすぐ近くの口元で止まる。

だが、次の瞬間、開け放たれた口に入れ噛んだ。カリッと良いと音を立てた。

口の中でモグモグと食べているのを機に、次々と弁当の中身を平らげていく。

それを見た少女は笑顔を取り戻し、静かに笑った。

そして、最後にりんごのつわいが残る。これが始まりの最後の試練。

箸を器用に扱い、りんごのつわいを取る。

俺にはもう迷いなどなかった。勿論、後悔もない。自分のプライ

ドも捨ててしまで、この子の笑顔を取つた。それだけだつた。

だけど俺は、ただ単に誰かが笑う顔が好きだつたのかも知れない。だから、落ち込む顔を見て弁当を食つ決心を固めた。

だが、今となつてはもうどうでも良いことになつていた。

何故なら俺は

。

「ふう、食つた食つた。ありがとうな、お世辞抜きでうまかつたぞ」

空っぽになつた弁当を不器用ながらも包み、少女に感謝も込めて返した。

「いえ、美味しかつたんなら良かつたです」

笑顔で弁当を受け取る少女。

こんな天使みたいな子がウチの学校はにいたんだなーと思つが、一つ疑問が浮かぶ。

だけど、アレ? なんでこんな子が、俺なんかに弁当を食わせるのだろうか? ふと、そんなことを思つ。

だが、腹いっぱいになつた満足感で、別に良いやへなびと一蹴りで終わつた。

何故なら俺は弁当が美味しかつたので万事OKだつたのである。

「ああ、そういうえば名前とか聞いてなかつたな」

空を仰ぎながら聞く。雲がゆつくりと流れていった。

「あー、そうでした。すっかり忘れていました」

あひやーと少女は苦笑いを浮かべた。

少女はスッと軽く立ち上がると、俺の前に立ち、クルリと体をこちらに向ける。

「初めまして。私、あなたと同じクラスの平富実玖^{ひらみやみく}って言います。今後ともよろしくお願ひします。クロトさん」

同じクラスメートらしい平富実玖に深々と頭を下げる。

マジでか？ 同学年だとは分かつていて、クラスまで同じだつたとは、全然気付かなかつた。

まあ、今日が初日だしな。しょうがないだろ。

自己暗示を掛けた。

上を見上げれば空、周りを見渡すと家々が立ち並ぶのが一望できる。俺と平富実玖は屋上にいた。

俺達が来たのはつこさつき。

それまでは、ここは不良共の集まりだつた。

だが、俺達の姿を確認するな否や、ガラにも合わず女性の悲鳴に近いものを発した不良共。そこで四方に散らばり震えていた。

俺達は誰もいない場所に足を運ばせ、そこに座る。

刹那、猛獸に追われた小動物が逃げるが如く不良共は逃げ出した。それも死に物狂いでだ。

まあ、静かになつたので別に良いが……無性にやりきれない気持ちだつた。

俺がここを選んだ理由は特別にない。

単に風に当たりたかった、それだけだつた。

だが、それは正解だつたようだ。

風は心地よく、俺と平富実玖以外はいないこの静かな空間。何より美味しかった弁当。

そして、その弁当の中身を食す場面を見られなかつたこと。

色々な意味で良かつた。

俺は空を眺めながら、ふと疑問を感じる。

いつも普通の日常を送るのが幸福か、或いは変化し続ける日常が幸福なのか。

今の俺は知るはざも無く、ただ今を幸福として過ごしていた

第6話・屋上（後書き）

まだ風邪気味です。
全く、しつこい病原菌です。

第7話・天空（前書き）

気付いたら、時間が経っていた。
これは宇宙外生命体の仕業に違いない。
そう思いたい作者であった。

第7話・夕空

真っ暗な道に俺はいた。

歩こうともせず、かといって退くこともない。単に突っ立つてゐるだけ。

静かに道を眺める。

下から前方に続く道を順次に見てみると、前方の少し先のほうで道が途切れていた。

そして、奥には闇しか見えない。真っ黒な闇だ。

何もかも飲み込むような、そつブラックホールとも言おうか。

それに近いものがそこにはあった。

後方を振り返る。一本道が続いていた。なんの歪みも見られない。

田を細め、軽く唇を噛む。口の端からは赤く染まつた液体が流れた。

俺はまた前方を向く。

一步、前へ進む。

そして、一步、一步、鉛のよつた足を進め始めた。

だが、幾度となく歩き続けても、道が途切れる所にはたどり着けなかつた。

近づくことさえも出来ていないうだ。

諦めて足をまた止める。

前方に見える闇を見た。

近いように見えて実際は遠くにあるそれ。

田に物体のような形は見られない。

ただ、そこにあるものを俺は知っていた。

それは

。

頭に強い衝撃を受けた。

ゆっくりと田を開ける。誰かの顔がアップで表示された。

「つむッ！？」

一気に田を見開く。

瞬間、もたれていた鉄柵に頭をぶつけた。

「…………う……痛え」

俺は頭を摩りながら今の状況を確かめようと、周囲を見る。

学校の屋上にいるのが分かる。

寝ぼけている頭がぼんやりと働き出す。

平富実玖の弁当を食べた俺は、満腹感に酔いしれていた。

そして、うとうとしていたのを覚えている。

その後、俺は眠ったのだろう。

簡単な仮説を立てる。

「それにしても」

今も尚、顔を下げよつともしない少女△を見た。

顔が田の前にある。

それに近すぎてイマイチ顔の表所が読み取れない。

「誰だ、お前?」といつより以前に、下がってくれ。顔が近すぎてまともに話せん

「おつと、これは失礼。君の寝顔がつい可愛くてね」

後方に飛びよつと離れる。

「よつと」

着地と同時に、フワリとスカートが揺れる。

「私は一年C組の小野田真。言つておくけど男じゃないよ。見た目通り、れつきとした女の子だから。よつとく」

ニッコリと笑いコツヘンと胸を張る。

いや、そんな自信満々に胸を張られてもな。

一年C組、それは亜美と麻里、そして、平富実玖と同じクラス。

つまり、俺もまた一年C組だったりするわけだが。

「じゃあ、小野田。俺に何用だ?」

そうなのだ。俺はコイツを知らない。なので相手も同じに違いないのだ。

だが、初対面の奴が目の前に、それも俺の寝顔を見ていた。

俺に何かがあった、と考える普通の反応だな。

「用?.....別にこれといつてないけど?」

……さいですか。

「それと私は苗字じゃなくて名前で呼んでいいから」

「じゃあ、何で起^レしたんだ？ 真^レ」

「起^レした……ああ、起^レしたのは私じゃないよ。君を起^レしたのはアレ。それともう一つ真^レつてのは止めて欲しいな~。あだ名で呼んで」

一々、注文の多い小野田真^レがひとさし指で何かを指す。

ボールだった。ソフトで使うボール。それが屋上に落ちていた。俺は片手を地面について立ち上がり、まだ痛む頭を抑えながらボールに近づく。

落ちていたボールを軽く持ち上げる。やはり、ただのボールだった。

ボールをお手玉のように扱い、聞いてみる。

「これが俺に？」

「そう。まずボールがカキーンって打たれて、屋上にヒューってやつてきて、君にドガーンとぶつかって、そんでコロコロと転がった」

微妙な擬音と体でボールを表現する。

これがまた微妙な出来なので俺は苦笑いを浮かべた。

「で、それで俺は起きたのか……マコ」

「うん、ただけど……マコは氣に入らない

起きた理由は分かった。だが、今度は何故コイツが田の前にいたのかが気がかりだ。

「じゃあ、何で意味も無く俺の顔を眺めていたんだ?」

「可愛かった、から?」

「ココと笑つマコとこ、うあだ名が嫌な真。

即答か。

「それと、たまに言つ寝言が可愛さを加倍にして……」

「ストッウウウウウブッ」

さつきの俺の寝顔を思い出す真に、すぐさま止めて掛かる。

何故か、口の端から涎のようなものが見え、ありもしない妄想を見ているかのようだった。

これを野放しにしていると、何を言つか分からぬ。

まあ、現状を整理するか。

寝顔を見ていて、顔の表情、寝言さえも知っている真。

そこから見て、そんな数秒つってトコじやないだろ？。

だから、もつと見ていたに違ひわけで。少し羞恥が湧く。

自分の顔が少し引きつるのを隠すよつこ、ボールが飛んできたであらうグラウンドを見る。

色々な部活が田に入る。陸上にソフトボール。他にサッカーやその他ももるも。

俺はこいつのものを見ると柄にもなく「青春してゐるな～」など思つてしまひ。

心はオジサンなのだらうか？ふと自分が思ったことに傷つく。

「ん？今つて何時だ？」

グラウンドよりも遠く、水平線に太陽が沈み掛けていることに気が付く。

空は夕暮れに染まつていた。

「エッ？えつと～、五時過ぎだつたかな？」

「…………マジか？マコジト」

「マジだよ…………あと、マスクシタみたいで、それヤダ」

う～ん、帰宅部として有り得ない時間帯にいるな、俺。

それ以前に、夕方じゃねえか。

さつさ今まで青空が広がる昼だったといつのこと、時間を無駄にした
な、俺。

確か、今日は昼を食べたら下校になつていたので、授業とかは大
丈夫のはずだ。

まあ、別に良いか。暇だしな。

何かが吹つ切れ、鉄柵に体を預けるようにして、外の風景を眺め
る。

この頃、風景らしい風景を見ていなかつた気がする。

何故なら、目の前にこんなにも綺麗だといつのこと、今まで見た
ことがなかつたからだ。

田のちよつと良い抱擁になる。口が思わず綻びた

「綺麗だな、シン」

「まあね。私、芸術とかそういうもんには疎いけど分かる気がする
よ。クロア」

さうやらシンといつあだ名を氣に入つたらしい小野田真は、俺と
同じような形で隣にいた。

一人で静かに眺める。

だが、その静かさをブチ壊す音が屋上に鳴り響く。屋上に行く扉が開いた音のようだ。

俺達一人は屋上の扉を見る。一人、そこにはソフトのゴーフォームを着た女子生徒がいた。

急いで走ってきたのか、息が上がっていた。

一旦、その女子生徒は周囲を見る。

「ここには俺達しかいなかつた為か、こちらに向かつて走ってきた。

「えっと、君ーここにボールが飛んでこなかつた！？」

俺に向かつて喋りかける。

一度、思考を巡らせた後、自分の手を見る。手にはボールが握られていた。

今の今まで存在を忘れていた俺は本当にオジサンになってしまったのだろうか？と本気で心配した。

俺達の前まで走ってきた女子生徒はハアハアと息を切らせ、前かがみになつて膝に手をついた。

「ボールつてこれのことか？」

ボールを差し出す。

「ああ、ありがとう……つて、君、クロトじゃない？」

ボールを受け取ろうとした女子生徒は俺を見てあだ名を言った。

俺は首を軽く傾げる。

「誰？」

「ええええええええええええええ！？？あんなに愛してくれたのに…！」

۱۰۰

「んなわけねえだろーーー今、初めて会つただろうがーーー」

思いつきりボケをかます女子生徒に、
津々に聞くシン。俺は全力で突つ込む。

俺は溜息を吐き、ほらよつとボールを軽く投げる。

女子生徒はサンキューとお礼を言った。

「つてか、何で俺の名を知つてんだ？お前」

ボーリの感触を確かめていた女子生徒は「へ？」と抜けた返事をした。

「名前って、知つて当たり前だよ？クロトと私は一緒にクラスじゃん」

「ああ……それで、名前なんだつけ？」

今更、俺と「ヨイツは同じクラスメートだった、などといつオチを聞き飽きた俺は、リアクションは止めて普通に名前を聞いた。

「私？私はかぐや。緑川かぐや」
みどりかわ

初耳だったが、ここは驚かずに反応しよう。

「おう、そうだつたな。かぐ……」

「かぐやだったのか、初耳だな」

「まあ、声に出して名前言つてないからね」

「……そうだつたな」

俺が返事しようとしたがシンが横から入り込んできた。

そのお陰で知ったかぶりは避けられたようだ。多分。

シンとかぐやはまるで知り合いかのような口調で喋る。

まあ、二人は同じクラスメートなので何ら不思議はないが、名前を知つてなかつたぞ？

だがしかし、全くの他人といつわけでもないので、顔見知りといった所だろうか？

二人の話題について行けない俺は、もうすぐ沈む太陽を眺める。

ひつそつと日の光は、屋上にいる俺達を時間の限り、照らし続け
ていた。

さてと、帰るかな。

第7話・夕空（後書き）

不定期ですが、今後とも読んでもらったなら嬉しいです。
では、また会いましょう。

第8話・再会（前書き）

途中からしゃつくりが止まらなくなつた。
だが、ふと気が付くと止まつてゐる。
なんとも〃ステリーな出来事だった。

鞄を肩に掛けようつて持ち、後ろを振り返る。

今もなお、夕日に照らされている校舎が目に映る。

「……あと三年か」

どこか意味深に口に出すクロト。

その言葉の奥にどんな真意があるのか、私には分からぬ。

他人だから、と言えばそうなのだが、私が、そうだ、と決定付けてくないのだ。

頭で理解したいと思えど、理解はできない。

だが、それ以前に自分のことは自分でしか分からぬ。

そんな当たり前のことを行は自分自身に再確認させられた。

「憂鬱だな……」

クロトは苦笑いを浮かべながらも、どこかこの先。

そう、何がが待ち構えているであらう未来を楽しみにしてこるよにも見えた。

私はそつと電柱から顔を覗かせている。

別に恥ずかしがり屋なわけではない。

かといって、あの人を眺めているだけで私は十分、などという恋焦がれている可憐な少女でもない。

ただの可憐な少女である。

そこには否定しない。何故なら真実なのだから。

今も尚、校舎を眺めていたクロトは、ゆっくりと歩き出した。どうやら帰るようだ。

用心に用心を重ねて尾行を開始する。

クロトを眺めながら、私は静かに微笑んだ。

「さて、どうしたものか」

誰にも聞かれない程度に呟く。

俺が校門を後にしてから数分が過ぎていた。

最初っから……いや、途中から突き刺すような視線を感じた。

中学の頃、俺はよく狙われていたので、誰かが見ている、といふ行為には敏感に反応する」ことが出来た。

なので、今回も似たようなものだ。

ただ、違うのが一点だけ。

向けられている視線が微妙に違うということだけだった。

何か殺意のようなものではなく、ただならぬ興味を抱いているようだ。

言わば、子供が玩具を見つけた、そんな興味本位の視線。

初めてその視線を感じたのは、校門で立ち止まり校舎を見ていた時だった。

威圧されるような視線を俺は感じた。

さり気なく帰り際に視線を感じた方向を見る。

それと同時に電柱に隠れる人陰を見た。多分、女の子だろう。

隠れた時にスカートらしき物が目に入った。

まあ、これで男だった時はこの上なく気持ち悪いが…………。

そして、数分が経過し、今に当たる訳だ。

女の子のストーカー行為はまだ続いていた。

そろそろ本氣で逃げた方が良いだろ？

それとも正体を突き止めて、詳しく説明しても？

一択で迷う。

だが、この視線……前にも感じたことがあったような気がする。

前といつてもつい最近……例えば、今日の朝とかに。

「…………あッ」

俺には一つ心当たりがあった。

あまり思い出したくない心当たり、それは。

「まさか……お前」

顔が引きつりながら振り向く。

サツと電柱に隠れる影。

だがそれは、残念な形となっていた。

今回の電柱は隠れるには細すぎたようで、体の中央だけを隠し左
右はバツチリ見えていた。

「いや、隠れてねえから

咄嗟に突つ込む。

「…………私は電柱、道路の脇に立ち並ぶ何本もの電柱。だから、そ
うとしといて」

思わずノリシシ「ハ」をかます。

「……やつぱ、無理か。残念」

さすがに諦めたのか、電柱から完全に姿を現した。

やはり女の子だつた

そして、今田の朝のあの子でもあつた。

お前……朝の奴か」「ああ、それでかと云ふでいたか

朝の如きにはなんの」とせむ
わいはる

本当にホケで毛でんしゃなしの?」

……惚ける気か？」

「惚けるも何も、私、分かんない」

可愛げに首を傾げる確信犯。ちやつかり、エヘッと笑いも入れる。

絶対にワザとやつてゐるが、アレ。

そもそも、可愛い仕草をしている所から有り得ん。

普通に考へて、そんな奴がこの世に存在してゐる訳がない。

いふとしたなら、そいつは策士だ。俺はそう思つ。

現実とはそんなに甘くないのだ。

それが現実とこゝ所、俺達が生きてこゝの世界の真理。

「……まあ、別にそんなこと、どうでも良いがな」

ハア、と溜息を吐く。

「それよりもなんでもまた、貧乏人である」の俺をストーカーしてたんだ?……えつーと、名前は?」

「ストーカーは興味程度かな。名前は……『國家機密』

「まづまづ、コッカー・キーリーと申つのか。じゃあ、キーリーで良いか?」

「……バカ?」

「いや、ボケだから突つ込めよ

「私、ボケ担当」

「知るか」

なんとなく流れに身を任せた話をした。結果、趣旨がズレる。

ハツと俺はそのことに気付き、自身の髪をグチャグチャにする。

「いやいや、違う」

「いやいや。だから、私はボケ担当だつてば」

「違うわ……俺が言つてんのは、なんで世間話をしてくるのかって
トコだ」

一瞬、固まるキーリング（一応、命名）。だが、すぐに動き出す。

「突つ込み所が違くない？もつと前の方からだとは思ひけど……

…

「まつとけ」

故意にストーカーという部分に突つ込みを入れなかつた俺は、また溜息を吐いた。

「ハア」

「アンタが溜息するとスッキリ。でも、その溜息聞いて、私ガックリ」

俺は肩を落として、何故かキミーツもまた肩を落とす。

意味が分からん。

なんだ？俺をバカにしてんのか？

一応、頭をぶつておぐ。

「イタツー……イタイ……何故、私をぶつんだ？」

少し涙ぐむキミーツ。ぶたれた部分を手で摩る。

しかし、そこはあえて何も言わず立ち去りうとした。

「ちゅうと、待てッ……」

キミーツが声を掛けてくるが無視する。

だが、それでもしつこべガミガミと頬い。もう一回、ぶつか？

ふと、そんな考えも出たが、面倒くさくなつた俺はあることを思ついた。

成功は低確率だが、相手に精神的ダメージは『えられる。

俺はキミーツに向き直り、人差し指で宙を指した。

たまに見るベタな奴だ。

「オイ！あそ」 UFOが…………」

「未確認飛行物体、英語ならアナイデンティファイアイド・フライング・オブジェクト、その頭文字をとりUFO。で、本当にいるかいないかと世間が賛否両論で争われているもののUFOが、どうかしたのかな？かな？」

「い、いや、だからあそ」…………」

「こんな一般的の町、それもどこの島でもありそうな道路を歩いている私達がUFOを見る訳がないよね」

「あ、いや、あそ」…………」

「もしも、もしもだけど、UFOのりしき物体を見たとする。だが、それをどうやって説明する？どうかに証拠があるの？あるなら見せて、UFOがいました、と証明できれば良いんだけど。それで何かな？」

「いえ、なんでもないです」

あからさまに怪しい笑みを浮かべたキーリングが、フフフと不気味な笑い声をし、嫌味として聞いてくる。

絶対に仕返しのつもりだら。

クッ、詳しく説明が入ったUFOがどうかしたか、などと聞かれて言える訳がないだろ。

あそ」 UFOがいる、などと馬鹿げたことを。

完全敗北をきした俺は苦し紛れにハハハと苦笑いする。

キミーツはとこつとハハハと楽しく笑っていた。

もつ一回ぶつ。

「イツー？……タ～。なんで、まだぶつ？」

再び涙目になつたキミーツを見て、いい氣味と満足げに笑つた。

「フウ、さてと。今から帰るが、まだお前はストーカーを続けるのか？俺は別にどっちでも良いが、早く帰らんと親が心配すんだろ？」

俺はキミーツに聞いてみる。

口を尖らせてしょげていたキミーツは顔を上げる。

目が点になつていた。

ん？俺、今変なこと言つたっけ？

自分の頭の中がはてなで支配されていき、首を傾げた。腕組も忘れずに。

刹那、キミーツが笑つた。

「フツ、やっぱ面白いな～クロトは」

先程まで悪魔の皮を被つたかのように不気味に笑つていた少女が、

今は打つて変わったよつて天使のよつて明るい笑顔になつてた。

イキナリの豹変つぱりに驚かされ、思わず今度はこつちが日が点になる。

だが、本当に良い笑顔になつててのを見て、そのまま天使に見惚れていた。

「つむか、クロトって、なんで俺を知つてんだ？」

クロトと呼ばれて違和感がなかつたことで突つ込みが遅れたが、一応突つ込んでおく。

時に悪魔であり天使のよつて容姿を持つキミーツは、ヘッ?、と間抜けな声を出した。

待てよ、と咄嗟にあるパターンが頭をよぎる。

「……私、クロトと同じクラスだけど?、それにクロトの後ろの席」

やつぱりか。

初めっから、なんとなくだつたが疑つていた。

そうじやないか?、などと思つていたら本当にやつだつたといつオチが連発。

最早こじまできたら清々しい気分だな。

でもな、いつも眞面目に事が進むと氣味が悪いとせえ思つ。

もしも、こんなちんけな世界に、それも普通である（～）この町に神様がいるとしたなら、迷わずハッキリと俺はこう言つださつ。

アンタは何をお考へで？、と。

そして、神様は言つて違ひない。

クロトが望まない世界への変革、と。

これはただの俺の考へでしかない、妄想でしかない。

だがな、神様とはこういう存在なのかも知れない。

面白ければ良い、そんな神様もいるところじだ。

なら、そんな神様に俺から一言だけ。

俺はアンタを許さない。

絶対、呪われるよな

俺。

第8話・再会（後書き）

やつぱり、書くのは面白いですね。
読むのもまた悪くないですが、これはこれで悪くない。
そう思いませんか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3442g/>

ある日の昼下がり

2011年1月16日02時26分発行